

<h1>指導資料</h1> <p>鹿児島県総合教育センター 平成29年4月発行</p>	<h2>家庭科、技術・家庭科（家庭分野）第42号</h2>	
	対象校種	幼稚園 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校

家庭や地域の生活課題を主体的に解決する能力の育成を目指した指導計画の工夫

家庭科、技術・家庭科では、単位数や時数が限られる中、教科の十分な目標達成に工夫が必要であるという声がよく聞かれる。そこで、「高齢者」と「住生活」の内容を例に、家庭や地域の生活課題を主体的に解決する能力の育成を目指した指導計画作成の工夫について事例を通して紹介する。

1 一般的な指導計画作成上での留意事項

家庭科、技術・家庭科では、基礎的な理解と技能を養うとともに、それらを活用して課題を解決するために工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成が重視されている。そのため、これまでも次のような点に留意し、指導計画を作成してきている。

- 学習指導要領等を基に、小中高のつながりを意識した題材の目標設定、育てたい生徒の資質の明確化
- 既習事項(知識、技能)の定着度及び興味・関心等の実態を把握
- 地域や家庭の実態を把握
- 学校の教育活動や他教科との関連
- 題材の選定・配列と時間配分

2 カリキュラムマネジメントの必要性

平成28年12月21日に示された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の

改善及び必要な方策等について(答申)」では、カリキュラム・マネジメントの三つの側面について以下のように示された。

- 1 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- 2 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- 3 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

これまでの指導計画作成での留意事項に加え、教科等横断的な視点や、より一層、生徒や地域の実態に基づくPDCAサイクルの確立や学校内外の資源活用の視点等からの指導計画作成の工夫が求められている。そこで、鹿児島県立大島北高等学校の実践

を基に、「高齢者の生活と福祉」と「住生活の科学と文化」の二つの内容を関連付けた指導計画作成の実際（p. 3 指導計画参照）について、以下の三点から述べる。

- 学校や地域の強みを生かす
- 内容の関連を図る
- 他教科等との連携

なお、二つの内容の評価規準を表1に示す。生徒の主体的な学習を通して、目指す生徒像である評価規準に到達できるようにするためには、地域や生徒の実態に沿った課題を設定し、指導計画を工夫することが重要である。

3 学校や地域の強みを生かす

住生活の内容は食生活等に比べ、十分な指導時間の確保が難しく、実生活との結び付きにくさや取り扱いの難しさなどから、指導が難しい内容である。また、高齢者の内容においては、生徒が高齢者と交流する経験が少なく、マイナスイメージをもって

めの導入に時間を掛ける必要がある。しかし、高齢者との交流経験が多いほど、高齢者に対するポジティブな印象が強まることは先行研究で明らかにされている。

大島地区のように高齢者を敬い、大切に

する習慣が根付いている地域では、交流の機会が多い。更に学校の特性として、「聞き書き」という地域の長老に歴史や生活文化を聞き取りする活動や、伝統的な行事への参加等地域とのつながりを大切にしている。そこで、高齢期を肯定的に捉えるための導入を削減することが可能となり、「認知症の理解」という、より具体的な課題から始めることができる。このように、学校や地域のよさや強みを見だし、それぞれの特性を生かすことにより、限られた時間を効率的に使う指導計画を工夫することができる。

4 内容の関連を図る

(1) プロジェクト学習の導入

家庭科では、学習した知識と技術を生かして、実際の生活と関連付けて問題解

表1 家庭総合「高齢者の生活と福祉」、「住生活の科学と文化」の評価規準

「高齢者の生活と福祉」 評価規準			
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
高齢者の生活と福祉などについて関心をもち、実践的・体験的な活動を通して主体的に学習活動に取り組んでいる。	高齢者の生活と福祉などについて、 <u>現代の家庭や地域の生活を見つめて課題を見だし、その解決を目指して</u> 思考を深め、適切に判断し、表現している。	高齢者と適切に関わることでできたり、高齢者の自立生活を支援したりするために必要な技術を身に付けている。	高齢者の生活と福祉などについて理解し、家族及び地域や社会の果たす役割を認識するために必要な知識を身に付けている。
「住生活の科学と文化」 評価規準			
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
住居の機能、住空間の計画、住環境などの住生活の科学と文化に関心をもち、意欲をもって学習活動に取り組んでいる。	<u>住空間の計画、住環境などについて課題を見だし、その解決を目指して</u> 思考を深め、適切に判断し、表現している。	主体的に住生活を営むために必要な住空間の計画などの技術を身に付けている。	住居の機能、住空間の計画、住環境などについて科学的に理解し、安全と環境に配慮した住生活を主体的に営むために必要な知識を身に付けている。

下線は筆者による。

* 1) 沼山博, 寺田晃『青年および高齢者が持つ高齢者認識に関する研究－相互のかかわりの視点から－』2013, 山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所

決の能力を身に付けさせることを重視し、中学校の「生活の課題と実践」や高等学校の「ホームプロジェクト」の一層の充実が望まれている。主体的に課題解決に取り組む意欲を喚起するために、このような個人で行う学習をクラス単位で行う「クラスプロジェクト『いつまでも自分らしく暮らす』』という題材で二つの内容を関連させた指導を行う。

また、年間を通して問題解決的な学習を繰り返し指導することによって、PDCAサイクルでの学習活動を定着させ、

家庭での実践をスムーズにし、問題解決能力の育成を図ることもできる。詳細は、指導資料第38号（平成25年4月）を参照されたい。

(2) 関連させる内容の実際

「高齢者」と「住生活」、二つの内容の関連を図ることで身近な課題と感じさせ、問題解決に向けての意欲を喚起する。題材全体のゴールが明確で課題の設定が適切であれば、学ぶ必要を感じることにになり、真剣に取り組む動機付けとなる。また、実践的・体験的学習は何のため

題材名「クラスプロジェクト『いつまでも自分らしく暮らす』」							
学校教育目標	生涯教育の観点に立ち、国際的視野を持ち、心豊かでたくましく、主体的に生きる人間の育成を目指す。						
学年の目標	学力の向上、規律ある生活、進路実現に向けて進路意識の高揚を図る。						
題材のねらい	住生活と高齢者の生活上の課題を見だし、その解決を目指して思考を深め、主体的に福祉の実現を目指す態度を身に付ける。また、安全と環境に配慮し、生涯を見通した住居の計画の重要性を理解する。						
	時	学習内容	学習のねらい	評価の観点			
				関	思	技	知
高	1	認知症の理解	認知症の正しい知識と高齢者の尊厳を支えるケアについて視聴覚教材等を通して理解する。	○			○
他		保健体育「保健」	加齢に伴う心身の変化について、形態面及び機能面から理解する。高齢社会に対応して、保健・医療・福祉の連携と総合的な対策が必要であることを理解する。				
他		公民「現代社会」	現代社会における諸課題（少子高齢化、高度情報化、グローバル化など）を扱う中で、現代社会に対する関心を高め、いかに生きるかを主体的に考察する。				
高	2	高齢者福祉の理念	高齢者の自立生活を支える高齢者福祉の基本的な理念と福祉サービスについて理解する。		○		○
総		総合的な学習の時間	テーマ「地域の福祉を知る」デイサービスセンターの見学、触れ合い活動等を通して地域の福祉の現状と課題について主体的に考察する。				
高	3	イキイキの秘訣	加齢に伴い全ての心身の機能が衰えるわけではなく、成熟期として捉えられる面や個人差を認識する。	○	○		
高	4 ～6	介護のポイント (車いすの介助)	日常生活の介助について、高齢者の意思の尊重や残存能力を生かす生活支援の在り方について考える。	○	○	○	○
高	7, 8	高齢者疑似体験	「いつまでも自分らしく暮らす家」について考えるため、どのようなことが不便で大変なのかという課題に気付く。(例：玄関の段差、布団とベッド、など)。	○	○		○
住	9	世界の住居	気候や風土に応じた各地域の住居の特徴や変遷、様々な住様式を取り上げ、住文化とその背景を考える。	○	○		○
住	10	環境共生住宅	安全性、快適性、持続可能性などの面からよりよい住環境に関心をもたせ、自然環境や社会環境と調和し、安心して住むことができる住居の環境について考える。	○			○
特		修学旅行	他地域の伝統的な住居、生活文化を見学。自分が暮らす地域の伝統的な住居と比較。自然環境や社会環境との調和、生活文化の継承について考える。				
高・住	11	家庭内事故	高齢者の死亡原因として家庭内事故が交通事故の約3倍等のデータ、どのような事故(場所、原因)が多いのかを理解し、事故防止の方法について科学的に考える。		○		○
高・住	12 ～15	安全で快適、自分らしく暮らす家	高齢になっても自分らしく暮らすことのできる家について検討する。平面図を読み取り、危険箇所を挙げ、グループ毎に課題と解決策を考え、発表し合う。	○	○	○	
高) 高齢者の生活と福祉、住) 住生活の科学と文化、他) 他教科、総) 総合的な学習の時間、特) 特別活動(学校行事等) (鹿児島県立大島北高等学校の実践を基に作成)							

に行うか、ねらいを明確に示すことで、生徒は主体的に思考、判断、表現しながら実習を進めることができる。例えば、高齢期の安全快適な住まいは、実際は個人に合わせた支援が必要であるにもかかわらず、「バリアフリー＝段差をなくせばよい」と考えがちであり、「和室を好む」という思い込みも見られる。仮説を立てた後、疑似体験を行えば、布団からの起き上がりはベッドと比較して困難だということに驚く。

固定的な見方に揺さぶりを掛け、思わぬ問題に気付かせることで生徒は思考を深め、生活上の課題解決に向けて主体的に考えるようになる（例：起き上がるための自立支援等）。

見通しをもって検証していく中で、問題の因果関係や原理等を明らかにし、解決に至る認識力、批判力、思考力、判断力、実践力などを育む。学習課題に即して科学的な根拠に基づき習得された知識・技能は、類似した問題にも生かすことができる。問題解決に迫る学び方を学習することは、主体的に生活を創造していかうとする態度の育成につながる。

5 他教科等との連携

学習をより問題解決的なものとし、より実感を伴うものとするために、「総合的な学習の時間」で学ぶ社会問題を家庭科の視点から関連付ける。例えば、福祉施設訪問や、その事前準備を通して地域の福祉の現状を知り、高齢者と実際に触れ合う体験から高齢者への理解を深めることができる。

修学旅行などの学校行事においても、「他

地域の住生活の文化とその背景」という家庭科の視点で気付きを促すことで、学習活動を広げることができる。また、保健体育科や地理歴史科、公民科、理科などの教科の関連する領域とつなぐことでより理解を深めることもできる。このように、教科等を横断した関連を探し出し、関連のある領域相互をつなぎ、単元の時数を増減したり、指導の順序を入れ替えたりすることで生徒は認識の総合化が図りやすくなる。

指導計画の作成に当たり、まず、育てたい生徒の姿を明確にすることが重要である。よりよい生活を工夫しようとする生徒の育成のために、学ぶ必要性を感じさせ、問題解決への意欲付けを行うことが大事になる。

今後の展望として、三年間を見通したストーリー性のある指導計画の作成が望まれる。各学校や生徒の実態を踏まえて、育てたい資質・能力を明らかにした計画を工夫したい。

<考えられるストーリーの例>

- 社会的自立を目指し生き方を考えるカリキュラム
- 持続可能な社会の在り方を探るカリキュラム
- 人との関わりを大切に、学び続けるカリキュラム

—引用・参考文献—

- 1) 沼山博、寺田晃著『青年および高齢者が持つ高齢者認識に関する研究』2013、山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 家庭編』平成22年、開隆堂出版
- 国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校共通教科「家庭」】』平成24年、教育出版
- 鶴田敦子、大竹美登利監修『技術・家庭 新しい題材・指導事例集』平成20年、開隆堂出版
- 田村知子『カリキュラム・マネジメント—学力向上へのアクションプラン—』2014、日本標準
- 池崎喜美恵他著『家庭科教育』2011、学文社

(教職研修課)